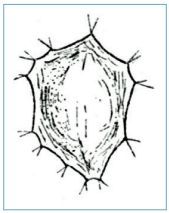
《第３部》 夏に成熟するクモ

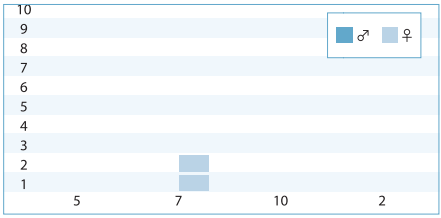
・コガネグモ
・ヤマシロオニグモ
・ワキグロサツマノミダマシ
・ドヨウオニグモ
・コシロカネグモ
・オオトリノフンダマシ
・オナガグモ
・ヒメグモ
・ヤリグモ
・シロカネイソウロウグモ
・ムラクモヒシガタグモ
・クサグモ
・イオウイロハシリグモ
・シボグモ
・カバキコマチグモ
・ヤバネウラシマグモ
・アサヒエビグモ
・アズチグモ
・トゲグモ
19 種

♀　　Photo：新井

♂　　photo：谷川



卵嚢図　　図：関口



コガネグモ

黄金蛛　　*Argiope amoena* L.Koch 1878

コガネグモ科

70 %

垂直円網

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 20 ～ 30 mm

♂ 約 5 ～ 7 mm

【観察ポイント】腹背に黄色の帯と茶褐色の帯が並ぶ。

【習性】日当たりの良い樹間・草間に直径 50cm ～ 1m の垂直円網を張り中心に占座。X 字形またはその一部を省略したかくれ帯をつける。南方系で市街地周辺では近年減ってきている。【卵嚢】淡緑色の多角形，平均 3 個，草の葉や樹木の間に作る，産卵期は 7 ～ 9 月。250 ～ 1800 卵，平均 1000 卵。

【トピック】種名はラテン語由来の「優美な *amoena*」の意味。ローレッツが愛知県立病院の窓越しに発見した美しいクモを標本を基にしてコッホが記載した。ローレッツの感動が名前に現れている［新海］。網は早朝にたたむことがある。幼体は網の半分を張り直すことがある［細野］。【蜘蛛合戦】鹿児島県姶良市加治木町や高知県中村市にはコガネグモの♀どうしを戦わせる伝承行事がある。加治木町では 6 月の第 3 日曜日，横棒の上に人々が持ち寄った二頭のクモを乗せ、勝負させる。勝ち技は「相手の尻に糸を掛ける」「相手の尻に噛みつく」「相手を棒から落とす」「棒からぶら下がった相手の糸を切る」。勝負の判定は行司が行う。

チュウガタコガネグモ（成熟：春、夏）
Argiope boesenbergi Levi 1983　**コガネグモ科**

♀ 約　15 ～　18 mm　♂ 約　5 ～　6 mm

腹背の黄色帯が分断されているためコガネグモとの識別は容易。本種はコガネグモより山地に多い。全国に分布するが，東北地方の採集記録はきわめて少ない。【網性】山道の樹間・草間に垂直円網を張る。網の中心にX字形あるいは一部を省略したかくれ帯を付ける。【卵嚢】灰緑色・多角形。6月頃産卵。

＜♀ Photo：安藤，卵嚢：池田＞

コガタコガネグモ（成熟：夏、秋）
Argiope minuta Karsch 1879　**コガネグモ科**

♀ 約　6 ～　12 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

腹背には黄色とオレンジ色（あるいはオレンジ色を含んだ褐色）の帯がある。刺激に敏感で，すぐ地上に落下し，落葉の下や葉の裏にもぐる。【網性】樹幹などに垂直円網を張る。網の中央にX字形のかくれ帯を付ける。平地から山地まで生息する。【卵嚢】淡褐色で，濃灰色の条斑がある。産卵は9月。

＜♀ Photo：山崎＞

ムシバミコガネグモ（成熟：夏）
Argiope aetheroides Yin et al. 1989　**コガネグモ科**

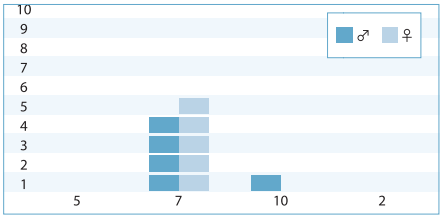
♀ 約　9 ～　18 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

「ムシバミ」の由来は腹部のへりがでこぼこしていることから。【網性】垂直円網を張る。かくれ帯は1～2本のものが多く，X字形はほとんど見られない。コガタコガネグモより大きく，振動などに対して敏感ではない。平地から里山に生息。分布は愛知県以南。【卵嚢】多角形でコガタコガネグモの卵嚢より細長い［新海］。

＜♀ Photo：高野＞

♀普通型　　Photo：森田

アトジロ型♀　　Photo：森田



ヤマシロオニグモ

山城鬼蛛　*Neoscona scylla* Karsch 1879

コガネグモ科

90 %

垂直円網

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 9 ～ 16 mm

♂ 約 7 ～ 12 mm

【観察のポイント】肩がなで肩。ただし同様のなで肩には平地ではイエオニグモ・コゲチャオニグモ・ヘリジロオニグモがある。メスの腹背斑紋は変異が著しい。

【習性】里山から山地に生息する。【網性】樹林地の周辺，林道などの樹間，草間に夕方垂直円網を張り，中心に止まる。昼間は網の一端の枝や葉裏に潜んでいる場合もあり，その時はキレ網を張ることが多い。翌朝網をこわして木蔭に隠れるが，個体により，昼間も網を張ったままのものがみられ，時には網の中心にいることもある［新海］。オスの成熟時期は神奈川県松田町で 6 月下旬で円網を張らずに夜間メスを探す。メスは夕方造網し，翌日午前中に破網する。7 月 3 日及び 8 日の夜 22 時頃にオスの求愛を観察。求愛はメスの網のこしきにつながる交尾糸を張る場合と縦糸を利用する場合があった。オスは糸を主に第 1 脚，第 2 脚ではじき，メスに信号を送るがメスは応答せず。メスの網上でオスが威嚇し合うことがある［池田千］。【卵嚢】黄色で黒いすじのある細長い卵嚢を草上や建物の周囲に作る 150 ～ 300 卵［新海］。

【トピック】種名の *scylla* はギリシア神話の娘の名前。「ヤマシロ」は山城国（京都府）に因む。

無斑型

アトグロ型

変異型

ヤマシロオニグモのメスの腹背の変異型にはセジロ型，アトグロ型，茶色型など様々な型が知られている。オスの斑紋は普通型が多い。腹部後方が他のヒメオニグモ類（*Neoscona* 属．コゲチャオニグモやサツマノミダマシなど）より少し長い。
＜無斑型♀ Photo：新井；アトグロ型 Photo：谷川＞

コゲチャオニグモ（成熟：夏）
Neoscona punctigera (Doleschall 1857)　**コガネグモ科**

♀ 約　9 ～ 16 mm　♂ 約　7 ～ 9 mm

腹部の色彩には茶色・灰色・赤褐色・黒褐色など様々。葉状斑のある個体も見られるが，大部分は単色である。【網性】雑木林内の樹間や草間に夜間，垂直円網を張る。昼間も網を張ったままの個体もある。【生活】1 月樹皮下に潜む。2 月 20 日，タラヨウの葉を折り曲げて裏に潜む亜成体を採集したところ，巣の中に他の小型のクモや昆虫の食べかすがあった［植村］。
＜♀ Photo：石田＞

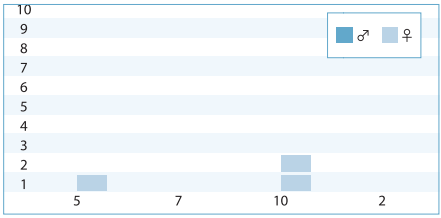
ニシキオニグモ（成熟：夏）
Araneus variegatus Yaginuma 1960　**コガネグモ科**

♀ 約　12 ～ 18 mm　♂ 約　9 ～ 10 mm

背甲は黒褐色，腹背は黒褐色に黄色の斑紋があり，生体では色彩でみわけられるが，退色した標本ではイエオニグモと見誤る。【網性】山地の神社・寺院に多く見られ，建物の周囲，灯篭，鳥居，および周辺の樹間に垂直または斜めに円網を張る。クモが隠れている位置と網の角度によって「正常円網」「呼糸円網」「キレ網」の 3 種類を張る［新海］。【卵嚢】緑色で，産卵は 10 月下旬から 11 月中旬まで。＜♀ Photo：高野＞

♀　　Photo：新井

若いハゼの実　　Photo：緒方清人



ワキグロサツマノミダマシ

脇黒偽薩摩　*Neoscona melloteei* (Simon 1895)

コガネグモ科

100 %　垂直円網

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 7 ～ 10 mm

♂ 約 6 ～ 9 mm

【観察ポイント】類似種サツマノミダマシは成熟がひと月早い。腹部の前部に突部がある。腹側面は黒褐色（サツマノミダマシは緑色）。

【習性】成熟は 7 月下旬に始まり，最盛期はお盆の頃。過去の記録のうち 5 月成体の例は不自然である。【網性】垂直円網の夕方の造網に要する時間は 20 ～ 30 分でオニグモ類の中では最も早い。網は早朝に破網され葉蔭に戻る個体が多い。刺激に敏感で採集しようとすると飛び下りる。平地から山地まで広く生息。都会の公園，神社，旧家の庭などでも見ることができる。【卵嚢】黄色のお椀形。産卵期 8 ～ 9 月。【生活】8 月 17 日～ 21 日の夜半から未明にかけて数回オスの求愛行動を観察［平松］。オスはメスの網の縦糸に網の外から交尾糸を張り，求愛信号を送る。

【トピック】京都府北東部，福井県西部地域周辺ではハゼノキのことをサツマと呼ぶ。サツマノミとはハゼの実のことである。腹部がハゼの実に似ていることからの命名。

サツマノミダマシ（成熟：夏）
Neoscona scylloides (Bös. & Str. 1906)　**コガネグモ科**

♀ 約　7 ～ 11 mm　♂ 約　8 ～ 9 mm

腹部側面が黒くないだけでなく，成熟時期も幼体の出現時期もワキグロよりひと月早いことで区別できる。【網性】垂直円網で上半分と下半分がほぼ均等な円網を夕刻に張る。朝には破網する。昼間は葉裏にひそむ。【生活】生態はワキグロと似ていると思われるが，生態報告は乏しい。オオモンクロクモバチに狩られる。アカクモヒメバチによる寄生もある。

＜♀ Photo：石田＞

ハラビロミドリオニグモ（成熟：夏）
Araneus viridiventris Yaginuma 1969　**コガネグモ科**

♀ 約　5 ～ 7 mm　♂ 約　4 mm

腹部の形態からトリノフンダマシの仲間と見誤る。山地に生息。成体は 6 ～ 8 月に出現。【網性】日当たりの良い林道や渓流沿いの樹間の高い場所（2 ～ 3m）に垂直円網を張る。斜めや水平の円網を張る個体も見られる［新海］。生態報告は乏しい。

＜♀ Photo：熊田＞

ムツボシオニグモ（成熟：春、夏）
Araniella yaginumai Tanikawa 1995　**コガネグモ科**

♀ 約　5 ～ 8 mm　♂ 約　4 ～ 6 mm

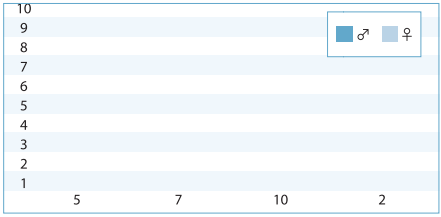
腹背後方の黒点は 3 対 6 個だが，2 対～ 4 対の個体もいる。オスは脚が黒い。【網性】樹林地の周辺，林道の広葉樹やクマザサなどの枝葉間，葉の表面や葉裏に小さな水平円網を張る。類似種に山地に見られるトガリハナオニグモ *Araniella displicata* (Hentz 1847) があり，酷似する。識別は生殖器による必要がある。【卵嚢】5 月に葉を巻いたなかに作られる。

＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：森田

腹背の色彩斑紋は特徴的で虎の顔を連想させる

花の上の♂　　Photo：谷川



ドヨウオニグモ

土用鬼蛛　*Neoscona adianta* (Walckenaer 1802)

コガネグモ科

10 %

垂直円網

成熟：春 **夏** **秋** 冬

♀ 約 6 ～ 10 mm

♂ 約 4 ～ 6 mm

【観察ポイント】色彩と斑紋で識別できる。腹背の色彩斑紋は特徴的で虎の顔を連想させる。斑紋はナカムラオニグモに似ているものの，ドヨウオニグモは腹部の黄色に対してナカムラオニグモは灰褐色。

【習性】夏の水田に普通だが，都市公園や雑木林では見かけないため平地での観察会での出現率は 10% と意外に低い。【網性】円網の向きは垂直から水平まである。【卵嚢】夏は 3 ～ 5 個を作り総卵数は 325 個，秋は 3 ～ 5 個を作り 259 個［宮下和］。【生活】春の幼体は 5 回の脱皮で 5 ～ 6 月に成熟。この成体が 7 月に産卵した出嚢幼体は 5 回の脱皮で 8 ～ 9 月に成熟。

【トピック】和名は陰暦「土用」の頃に目立つクモという意味である。キンヨウグモはドヨウオニグモより発生が早いので，「ドヨウ（土曜）」があるのだから「金曜」グモがあってもいいだろうという意味での冗談による命名であったが，ドヨウオニグモは「土曜」の意味ではない。

ナカムラオニグモ（成熟：夏）
Larinioides cornutus (Clerck 1758)　**コガネグモ科**

♀ 約　9 ～ 12 mm　♂ 約　7 ～ 9 mm

成体は 1 年中見られる。山間部の草原や建物の周囲に多い。分布は福井県以北の日本海側各県および長野県では普通種。【網性】垂直円網を張り，その一端に袋状の住居を作る。【備考】リンネより先に最初に二名法の学名でクモを記載したスウェーデンのクラークの論文に記載されていて，ヨーロッパとの共通種である。クラークはリンネの友人だった。

＜♀ Photo：高橋＞

ヌサオニグモ（成熟：夏）
Araneus ejusmodi (Bös. & Str. 1906)　**コガネグモ科**

♀ 約　6 ～ 8 mm　♂ 約　5 ～ 6 mm

特異な斑紋から識別は容易である。「ヌサ」とは腹背の斑紋が幣（ぬさ）状であることから岸田久吉の命名。幣は神社の祭壇中央に祭られる神代の飾りもの。【網性】夕方円網を張り，早朝に破網，破網しない個体もいる［中平］。産卵期は 5 月下旬。

＜♀ Photo：谷川＞

ヤミイロオニグモ（成熟：春、夏）
Alenatea fuscocolorata (Bös. & Str. 1906)　**コガネグモ科**

♀ 約　5 ～ 6 mm　♂ 約　4mm

腹背の肩から心臓形の紋様が見える。これがヤミイロオニグモやオオクマヤミイロオニグモの共通の特徴。オオクマヤミイロオニグモと酷似する。【網性】林道の樹間，草間に垂直円網またはキレ網を張り，中心に占座する。昼間は網の一端の枝や葉裏に簡単な住居を作り潜む。【卵嚢】黄色の半球状で，葉上や樹皮面に作られる。40 ～ 70 卵［新海］。産卵期は 5 月下旬～ 7 月。

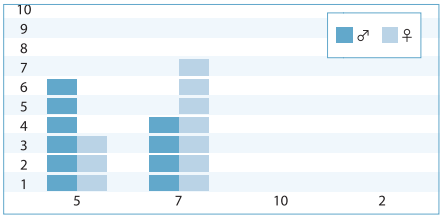
＜♀ Photo：谷川＞

43

♀　　Photo：森田

腹背の黒条は他のシロカネグモも同じ
肩の黒点部がこぶ状でない

チュウガタシロカネグモ♀　　Photo：石田



コシロカネグモ

小白銀蛛　*Leucauge subblanda* Bös. & Str. 1906

アシナガグモ科

90 %

水平円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 8 ～ 9 mm

♂ 約 5 ～ 7 mm

【観察ポイント】成熟時期がコシロカネグモは5月中旬から，オオシロカネグモは6月下旬から，チュウガタシロカネグモは4月と9月である。オスに二型がある。腹背の黒条は他のシロカネグモも同じである。

【習性】オオシロカネグモよりも乾燥に強い。山地渓流にも見られる。【網性】草間に水平円網を張る。丹沢では上限は標高 610 m，オオシロカネグモの上限は 570 mである。

【トピック】属名はギリシア語で「白く光っている」という意味で，種名はチュウガタシロカネグモ「blanda に似ている」という意味。刺激により黒い条斑は太くなる（他のシロカネグモも同様である）。これは刺激で皮下の銀色結晶を含むグアノサイトが収縮して褐色の腸管が目立つためである。シロカネグモ類に限らず，クモの腹部の銀色の元はグアニン結晶である。グアニンは塩基で窒素排出物でもあり，結晶は紫外線を反射する効果がある。

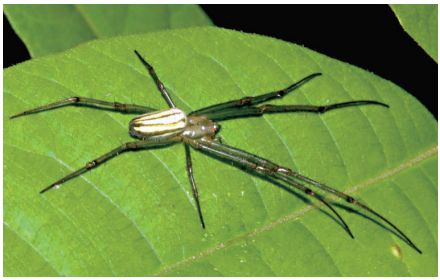
オスの二型

コシロカネグモのオスにはメス成体同型と，淡斑茶色の型（オオシロカネグモのオスに類似する）の二型がある。サイズの小さい個体に前者の型が，大きい個体に後者の型が多い。特に後者の型のオスはオオシロカネと見誤る例が多い。同日（5 月 29 日）同所で採集したオス亜成体，メス型オス，オオシロ型オスを並べて示した [池田]。

チュウガタシロカネグモ（成熟：春、秋）
Leucauge blanda (L.Koch 1878)　**アシナガグモ科**

♀ 約　9 ～ 13 mm　♂ 約　6 ～ 10 mm

一対の肩の黒点がこぶの上にある。オオシロカネグモやコシロカネグモでは黒点はあってもこぶ状に盛り上がることはない。南方種であったが，1980 年代以降，関東南部まで北上した。【生活】神奈川県小田原市では 4 月と 9 月に成熟する。比較的乾燥に強いようである。産卵後に卵が無くなっても腹部が縮小しないため，妊娠時期を長めに見誤る [池田]。
＜♀ Photo：森田＞



オオシロカネグモ（成熟：夏）
Leucauge celebesiana (Walckenaer 1842)　**アシナガグモ科**

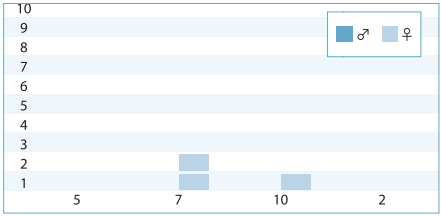
♀ 約　11 ～ 15 mm　♂ 約　7 ～ 12 mm

オオシロカネグモの体長は通常 10mm 以上あるが，体長だけからコシロカネグモと識別するのは間違いのもとになる。越冬態は幼体で，地表近くのカンスゲ株の下方で越冬する [加藤輝]。メスの外雌器は左からオオシロカネ、チュウガタシロカネ、コシロカネである［谷川原図を改写］。
＜♀ Photo：石田＞

♀♂ Photo：新井

背甲が茶色で黒くない
腹背に白い領域がない

トリノフンダマシ♀ Photo：新井



オオトリノフンダマシ

大偽鳥糞　*Cyrtarachne akirai* Tanikawa 2013

ナゲナワグモ科

70 %

同心円状水平円網

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 10 ～ 13 mm

♂ 約 2 ～ 7 mm

【観察ポイント】トリノフンダマシ類が網を張ることがわかったのは1950年代で，夜間観察による。オスはメスに比べて大変に小さい。

【習性】昼間は葉の裏に潜む。【網性】湿度の高い夜，6時頃から同心円状水平円網（厳密には同心円ではない）を張る。午前4時頃に破網し，丸めた網糸を食べる［新海明］。幼体は網を張らずに虫をつかみ取りで捕獲する［熊田ら］。造網は湿度の上昇によることが判明［宮下，谷川，馬場］。湿度が低いと急速に粘球の粘着力が低下する。オニグモ類の粘球の粘着力の低下はトリノフンダマシ類ほどではない。【卵嚢】黄褐色の卵嚢2～4個（最高7個）を作り，自分が潜む葉の近くにつるす。200～400卵（最大600）。求愛は7月末。秋に出嚢［新海］。

【トピック】類似種にトリノフンダマシ *C. bufo* (Bos.&Str. 1906) がいて，背甲が黒褐色で腹背に白い領域がある。関東地方ではトリノフンダマシは9月に成体，9月中旬に産卵，産卵後3週間をして出嚢，ツバキの葉裏などで2令幼体で越冬する［鈴木勝］。

アカイロトリノフンダマシ（成熟：夏）
Cyrtarachne yunoharuensis Strand 1918　**ナゲナワグモ科**

♀ 約　5 ～　7 mm　♂ 約　2 mm

生態はオオトリノフンダマシと同様である。【網性】同心円状水平円網で平均で縦糸 10 本，横糸 6 本，ワク糸 4 本であった。横糸は交互に半円状に張られるが，その出発点となる縦糸は，必ず網の最下方のものが選択される。横糸に虫がかかると，一方の縦糸との接点が切れる構造になっている［新海明］。

＜♀ Photo：新井＞

アカイロトリノフダマシのソメワケ型

ソメワケトリノフンダマシという別種と思われていたが，アカイロの色彩変異であった。

＜黒色型♀：森田，ソメワケ型♀ Photo：新井＞

シロオビトリノフンダマシ（成熟：夏）
Cyrtarachne nagasakiensis Strand 1918　**ナゲナワグモ科**

♀ 約　5 ～　8 mm　♂ 約　1 ～　2 mm

腹背に横に白帯が入る型である。網形や生態は他のトリフン類と等しい。【求愛】メスの 1 本の交尾糸上に置かれたオスは 2 秒ほど体を振動させた。メスは 1・2 脚で手招く。オスは接近し交尾後，交尾糸上に戻った。この行動を 4 度くり返した。交尾は 3 ～ 6 秒間だった（8 月 11 日）。8 月 12 日は 5 回交尾したが，13 日は雌雄ともに反応しなかった．8 月 14 日にメスは産卵，夜 5 回交尾。8 月 15 日 1 回交尾。8 月 24 日オス死亡［泉］。また、クロトリノフンダマシとされていた個体はシロオビの色彩変異（黒色型）だった。

＜♀ Photo：初芝＞

日本のナゲナワグモ科の研究（Ⅰ）

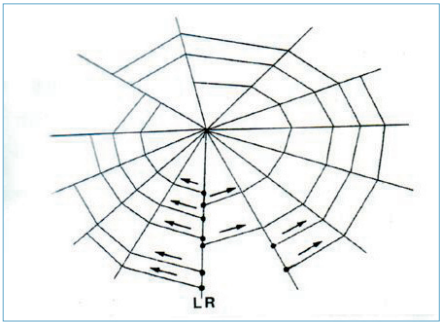
夜間観察による発見

鳥の糞に似た形態をもつトリノフンダマシ。以前は，網を張ることが確認されていなかった。熱帯地方でウォーレスやベーツによって観察されていた鳥の糞に擬態したクモが，網を張らないカニグモの仲間だったことも，このような見方に影響していた。

けれども，実際にはトリノフンダマシはワク糸が 1 m以上にもなる大きな同心円状（同心円ではない）水平の円網を張るのだった。そのことが発見されたのは，いまから半世紀以上も前，1950 年 8 月 19 日 23 時のことだった。発見者は当時 18 歳だった大熊千代子氏である。トリノフンダマシが網を張るのは夜だった。クモを夜間観察する習慣がなかったので誰も気づかなかったのである。大熊さんは夜を徹して網の生態を調査，9 月 12 日までに三度の観察で，造網時刻や破網時刻，造網法，餌の捕り方などを観察した。高等女学校を卒業して福岡県の衛生試験場に勤務していた大熊さんを九州大学に紹介した萱嶋泉氏は大熊さんの話に注目した。さっそく夜間観察をして網を確認，日本蜘蛛学会関西支部報 Arachnological News 創刊号（1952 年）に「トリノフンダマシ *Cyrtarachne bufo* (Boes. et Str.) の網について」を報じた。ガリ版印刷 3 ページの報告だったが，蜘蛛研究者に衝撃を与えた。

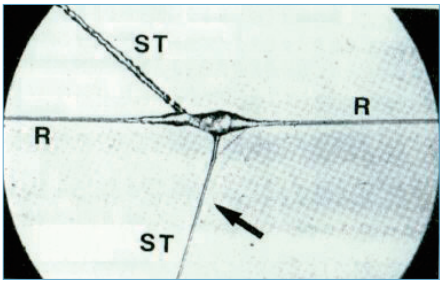
網の構造と造網

新海明氏の研究でアカイロトリノフンダマシの網の構造を見てみよう。網は平



アカイロトリノフンダマシの網とヨコ糸の造網過程（新海明）
ヨコ糸は・印から左右交互に張られた。矢印はヨコ糸を張った方向を示す。　LR：最下方に位置するタテ糸。

均で縦糸 10 本，横糸 6 本，ワク糸 4 本であった。造網の際にオニグモ類の垂直円網の張り方とは異なり，足場糸は張られない。縦糸が張られた後で，網の最下方の縦糸から横糸が交互に半円状に張られていく。このとき蛾がかかると決った端が切れる接合（low shear joint）になっていた。



矢印の糸が細く切れやすいロウ・シア・ジョイント構造。
獲物がかかると切れる。　R：タテ糸／ST：ヨコ糸

足場糸を張らない点でトリノフンダマシの網はコガネグモ科の垂直円網やアシナガグモ科の水平円網とは根本的に異なった造網である。造網を共通にするクモにナゲナワグモ科の右記の仲間がいる。

ツシマトリノフンダマシ（成熟：夏）
Paraplectana tsushimensis Yamaguchi 1960 **ナゲナワグモ科**

♀ 約　7 ～ 10 mm　♂ 約　2 mm

テントウムシと見誤るほどの赤地に黒点のあるトリノフンダマシの仲間である。次のサカグチとともに関東では稀産種で，オスがなかなか確認できなかったが，張替智行氏の幼体からの飼育と谷川明男氏の分類学的研究により次々と判明した。網の長径 30 ～ 40cm，短径 20 ～ 30cm，縦糸 4 ～ 7 本，横糸数は区画により異なるが，縦糸の長い区画では 5 ～ 8 本であった。

＜♀ photo：別府史朗＞

サカグチトリノフンダマシ（成熟：夏）
Paraplectana sakaguchii Uyemura 1938　**ナゲナワグモ科**

♀ 約　7 ～ 9 mm　♂ 約　2 mm

赤地に白点をもつ稀産種である。

＜♀ photo：一寸木肇＞

♀

♂

ワクドツキジグモ（成熟：夏）
Pasilobus hupingensis Yin, Bao & Kim 2001　**ナゲナワグモ科**

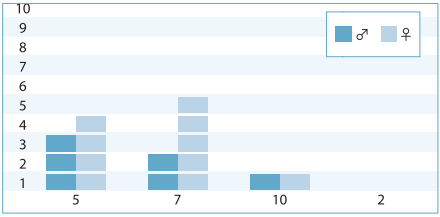
♀ 約　8 ～ 10 mm　♂ 約　3 mm

ワクドはヒキガエルの九州方言。以前の種小名の「*bufoninus*」はラテン語の「ヒキガエル bufo」の意味。ツキジは九州のクモ研究家・築地満男氏に依る。樹間に水平の三角網を張る。網は同心円状水平円網を省略した型である。

＜♀ photo：谷川，♂ photo：新井＞

♀と卵嚢　　Photo：森田

緑色♀　　Photo：石田



オナガグモ

尾長蛛　*Ariamnes cyrindrogaster* Simon 1888

ヒメグモ科

100 %

すじあみ
条網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 25 ～ 30 mm

♂ 約 12 ～ 25 mm

【観察ポイント】松葉のように見え，他に形の似たクモはいない。体色は緑色が多いが，地域によっては 5%から 30%の間で茶色の個体もいる。色の差異の原因や生態的な意義は不明。丹沢での上限は標高 790 m，垂直分布の区分では山地帯である。

【習性】かん木の枝の間に張られた粘性のない糸の途中にいて，虫を待ち伏せする。糸を伝って来る虫はほとんどがクモであり，徘徊性種が多い。クモに気づくと，第 4 脚の間に粘球糸を出して投げつける［新海・新海明］。このような投げつけ粘球糸はヒメグモ類に特有の武器である（16 頁）。【卵嚢】13 ～ 17mm 長，4 ～ 5mm 幅の卵嚢を 1 個を葉または枝の間に不規則に引いた糸の中に吊るす［新海］。7 月下旬，出嚢幼体は列を作って分散する［池田］。出嚢幼体は 50 ～ 60 頭［細野］。

【トピック】都市化が進む街にもクモ食いのクモやイソウロウグモは目立つ。ただしこれらのクモには小形種が多い

ツクネグモ（成熟：春、秋）
Phoroncidia pilula (Karsch 1879)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 mm　　♂ 約　2 mm

微小なクモだが，ゴツゴツした形は特徴的。【網性】スギ林などのうす暗い林内に粘球のついた１本の条網を張る。ヒメグモの仲間で，トラップ・スレッドだけを張ったものと考えることが出来る。【生活】千葉県君津市で３月 25 日に求愛・交尾が観察されている［新海明］。

＜♂ Photo：千国＞

マネキグモ（成熟：春）
Miagrammopes orientalis Bös. & Str. 1906　**ウズグモ科**

♀ 約　7 ～ 15 mm　　♂ 約　4 ～ 6 mm

枯れ枝のように見える。【網性】条網。数本の糸には篩板から出した篩板糸が巻かれていて，虫の脚などにからむ。この糸に粘球のような粘着性はないが，接着力はあり，虫が捕えられる。【卵嚢】５月下旬から棒状で長さ 10 ～ 30mm の茶褐色の卵嚢を作る。卵嚢は１～３個を条網に沿ってとりつけ，親はそばで保護している。40 ～ 100 卵（平均 60 卵）［新海］。日周性など生態に関しては西野の詳細な研究報告がある［西野］。

＜♀ Photo：森田＞

オウギグモ（成熟：秋）
Hyptiotes affinis Bös. & Str. 1906　**ウズグモ科**

♀ 約　4 ～ 5 mm　　♂ 約　4 ～ 5 mm

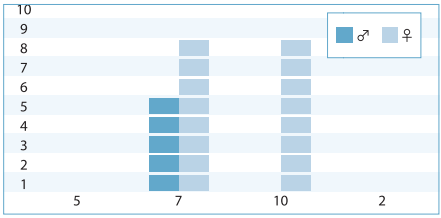
【網性】篩板糸の扇網である。扇網のかなめの部分で網全体を引っ張っていて，獲物がかかるとそれを放すので，網がゆるんで糸が獲物にからみつく。出嚢直後の幼体は扇網の一部しか張れない。扇網の造網は縦糸，足場糸，横糸の順で円網と同じ手順を経る。

＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：石田

球形の腹部
どの脚も黒い

網　　Photo：：池田



ヒメグモ

姫蛛　*Parasteatoda japonica* (Bös. & Str. 1906)

ヒメグモ科

100 %

シート付き不規則網

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 3 ～ 5 mm

♂ 約 2 ～ 3 mm

【観察のポイント】オレンジ色・球形の腹部でどの脚も黒い長靴下をはいたように黒い。

【習性】庭の常緑樹に不規則網を張るが，下部にシート網がある。【網性】シート付き不規則網は本種のみの特徴である。不規則部を迷網と呼ぶこともある。網に粘性はない。迷網に当たってノックダウンされ，シート網に落ちた虫がクモに捕獲される。【生活】7 月に成熟したオスはメスの網に同居し，亜成体メスをガードする。メス網に侵入したオス同士は糸を引き合ったり脚を打ち合ったりして闘い，大きいオスが勝つ。勝ったオスはメスの近くに位置し，脱皮直後にメスと交尾。交尾後，メスは葉を吊り産卵，卵嚢を葉の下に平均 3 個作る。1 メスの総卵数は約 100 卵。子グモに母親は捕獲した虫を与える。給餌されると子の体色は茶色になる。冬季に小形個体は淘汰される［池田］。4 月の幼体の網にシート部は無い［池田泉］。

【トピック】吉田哉により，ヒメグモがヒメグモ属からオオヒメグモ属に転属されたことを理由に，和名をニホンヒメグモに改称する提言がなされた。本書では，和名はできるだけ変更しないという見解と，1960 年の八木沼健夫の図鑑の和名を尊重する立場から提言には従っていない。

コンピラヒメグモ（成熟：夏）
Parasteatoda kompirensis (Bös. & Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

ヒメグモに色彩や形態の似たクモはコンピラヒメグモ，キヒメグモ，キヨヒメグモである。コンピラヒメグモは脚が黒くない。【網性】シート部のない不規則網である。これらヒメグモ類は網で捕えた虫に粘球を投げつけることで捕獲する生き方が都市下でも生き残る適応力となっているようだ。【生活】ヒメグモより成熟が早く，6 月には成体が見られる。繁殖習性は未記録。
＜♀ Photo：池田＞

キヒメグモ（成熟：春、夏）
Parasteatoda asiatica (Bös. & Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 ～　3 mm　♂ 約　2 mm

腹背の斑紋は明色型から暗色型まで変異が大きい［久保寺］。腹背は歌舞伎の隈取り模様を思わせるため，中平清はカメンヒメグモと仮称していた。キヒメグモの暗色型は斑紋ではキヨヒメグモと区別できない。【網性】不規則網にシート部はない。【生活】キヒメグモは 4 月に成熟する［松本誠治］が，夏にもう一度成熟する二化性を示す。
＜図：斑紋変異の一部は中平清による＞

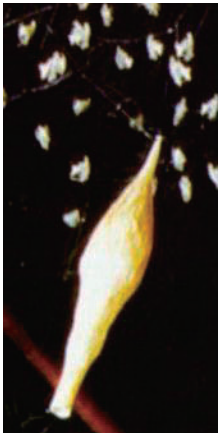
キヨヒメグモ（成熟：夏）
Parasteatoda oculiprominens (S.Saito 1939)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

キヨヒメグモはキヒメグモの暗色型とは斑紋では区別できない。【網性】シート部のない不規則網を張る。【卵嚢】雨だれ型の白い卵嚢で秋に不規則網に 3 ～ 10 個吊るされる。キヒメグモの卵嚢もほぼ同形である。【越冬態】幼体が樹皮下に 1 ～ 1.5mm ほどの袋を作り，その中で越冬する［新海］。乾燥が進む都市下の公園でもこれらのヒメグモ類は個体数を維持し，生息している。
＜♀と卵嚢 Photo：池田＞

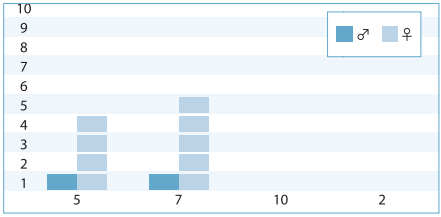
♀　　Photo：森田

腹部がとがる
♂の頭に突出部



ヤリグモ卵嚢　Photo：新海

ヒゲナガヤリグモと卵嚢
Photo：池田



ヤリグモ

槍蛛　*Rhomphaea sagana* Dön. & Str.1906

ヒメグモ科

100 %
網へ侵入

成熟：春 夏 秋 冬
♀ 約 6 ～ 11 mm
♂ 約 6 ～ 8 mm

【観察ポイント】腹部先端がとがる。ヤリグモのオスの中眼域中央にはキノコ状の突起がある。それがない場合は別種ヒゲナガヤリグモかタテスジヤリグモである。南西諸島にはさらに別種が生息する。

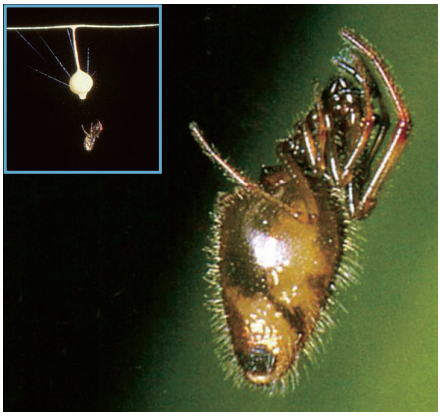
【習性】網を張る他のクモの網に侵入して網主を攻撃，捕食する。クサグモ・サラグモ類・ヒメグモ類・ジョロウグモ・ゴミグモ・オオシロカネグモ・ウズグモなどがよく捕えられる。オナガグモも捕獲される。【生活】飼育下で出嚢後 3 ～ 4 回の脱皮で成熟し，年 4 世代を得た［加藤む］。【産卵】8 ～ 9 月，成熟したメスは，目の荒い網で立方体の産室を作り，その中央に槍の穂形の卵嚢を吊るし，ガードする。幼体は卵嚢筒状部の下端に孔を開けて出てくる。卵嚢には長短 2 型がみられる［中平］。

【トピック】ヤリグモの名前は卵嚢の形に由来する。ヒゲナガヤリグモの卵嚢はヤリグモより細長い。

チリイソウロウグモ（成熟：夏、秋）
Argyrodes kumadai Chida & Tanikawa 1999　**ヒメグモ科**

♀ 約　7 ～　11 mm　♂ 約　5 ～　9 mm

【網性】網を張らずに，クサグモやコクサグモの網に居候する。クサグモがいないとヒメグモの網に居候する。寄主であるクサグモがチリイソウロウグモに襲われて食われるのは脱皮中，または脱皮直後である。南方のスズミグモ利用個体群とはさまざまな点で同種とはいえ形質が異なる点がある［馬場］。【卵嚢】母グモがガードしていた 3 個の卵数は 90・59・39［池田］。
＜♀ Photo・卵嚢 Photo：千国＞



トビジロイソウロウグモ（成熟：夏）
Argyrodes cylindratus Thorell 1898　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　3 ～　4 mm

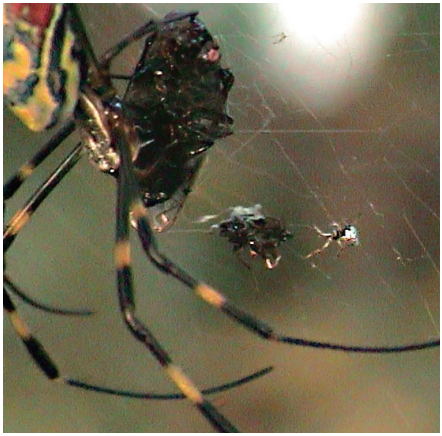
山地に生息。【網性】網を張らず，主に渓流上や林道に水平円網を張るシロカネグモ類の網に侵入し，網主が食べない小昆虫や，網主が捕えた獲物を盗み食いする。時には網食（あみく）いもする。【分布】北上してきた代表的な種類で，1975 年以前は関東地方からの採集記録はなかった［新海］。
＜♀ Photo：高野，卵嚢 Photo：新海＞

オダカグモ（成熟：夏）
Chrysso argyrodiformis (Yaginuma 1952)　**ヒメグモ科**

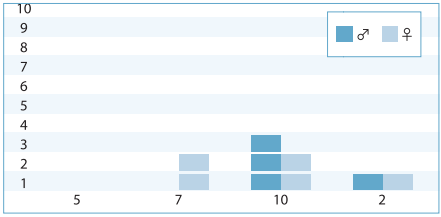
♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

ヤリグモに似た腹部だが，流線形の黒い条が 2 対または 3 対ある。林道や渓流沿いの広葉樹などの葉裏に見られる。【網性】全粘性の垂糸網と不規則網を張る。居候生活ではないし，ヤリグモのようなクモ専食でもない。【分布】南方系のクモだが，近年関東でも局所的に見られる。
＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：石田



ジョロウグモに居候する　　Photo：新井



シロカネイソウロウグモ

白銀居候蛛　*Argyrodes bonadea* Karsch 1881

ヒメグモ科

90 %　網へ侵入し居候

成熟：春 **夏** **秋** 冬

♀ 約 3 ～ 4 mm

♂ 約 2 ～ 00 mm

【観察ポイント】仁丹のようなクモ。小さく白銀色。網主の網に残した卵嚢の形でもある程度種類が分る。シロカネイソウロウの卵嚢は「つぼ型」，フタオイソウロウは「びん型」，チリイソウロウグモは「球型」と区別できる（次頁）。

【習性】網を張らずに，他のクモの網に居候して網主の残した餌を食べる。【卵嚢】2 ～ 3mm のつぼ型，を網主の網の中や，その近くに 2 ～ 5 個吊るす。30 ～ 50 卵［新海］。産卵期は 7 ～ 9 月。

【トピック】ジョロウグモの 1 網に 70 個体いた記録がある。シロカネイソウロウグモは網主を補食することはないが，まどい中の幼体を捕食した例が観察されている（ジョロウグモ幼体及びナガマルコガネグモ幼体）。イソウロウグモでも、フタオイソウロウグモやチリイソウロウグモでは，網主を襲って捕食する例が観察されている。

フタオイソウロウグモ（成熟：春、夏、秋）
Neospintharus fur (Bös. & Str. 1906)　**ヒメグモ科**

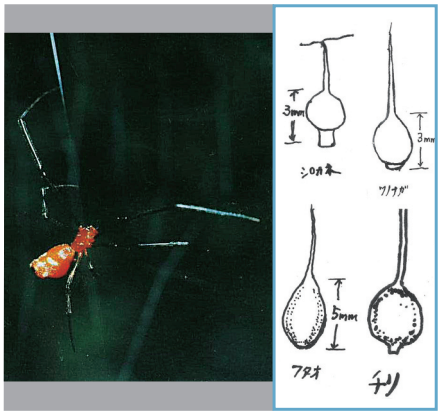
♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

腹部の腹部のふたつの突起を広げたり，せばめたりする［池田］。ツノナガイソウロウグモに酷似する。【網性】自分の網を張らず，網主が食べない小昆虫を捕えたり，ときには網主を襲う。網主が襲われるのは交尾中・脱皮中・脱皮後などである。サラグモ類・ヒメグモ類・クサグモ類・スズミグモ類の網に居候する。
＜♀と卵嚢 Photo：新海＞

ツノナガイソウロウグモ（成熟：春）
Neospintharus nipponicus (Kumada 1990)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 ～　5 mm　♂ 約　3 mm

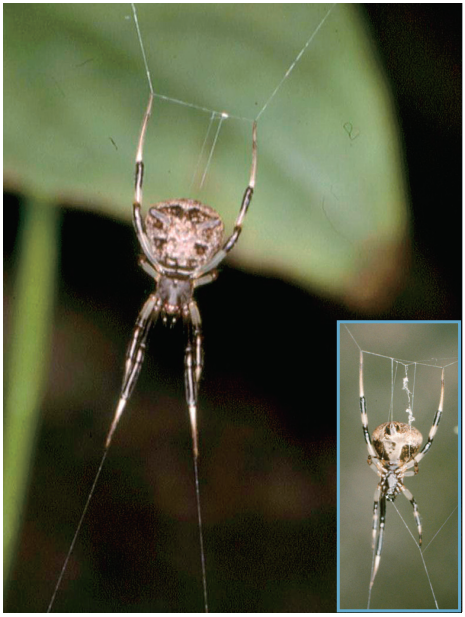
フタオイソウロウグモに酷似する。【網性】自身で下草間に不規則網を張る場合もあるイソウロウグモ。クサグモ類・サラグモ類などの網に侵入して，網主の食べない小昆虫を捕食する。【卵嚢】3 ～ 6 個を作る。中は胚 9 頭と 11 頭（7 月 13 日秦野市）［池田］，網内に 1 ～ 2 個（6 月 23 日）から 4 個（7 月 23 日）まで。7 月 7 日には幼体 15 頭，16 頭，卵 10 個の 3 個（君津市）［新海明］。産卵期は 6 月下旬から 8 月。＜♀と卵嚢 Photo：高野＞



アカイソウロウグモ（成熟：夏）
Argyrodes miniaceus (Doleschall 1857)　**ヒメグモ科**

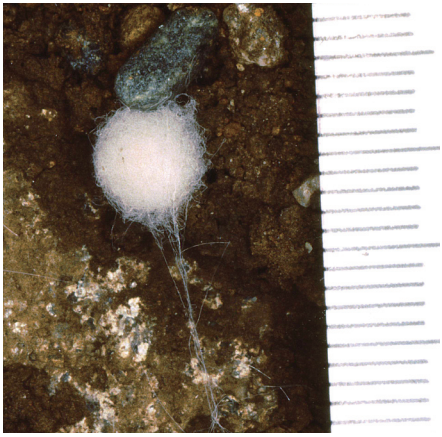
♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　4 ～　00 mm

南方系の赤い体色のイソウロウグモで，本州では千葉県以南の太平洋側各県に分布し，平地から山地に生息。【網性】網を張らずに，ジョロウグモ類・コガネグモ類・オニグモ類などの網に侵入して居候生活をする。【卵嚢】22･14･22 卵［安田］，産卵期は 8 ～ 10 月。
＜♀ Photo：新海＞

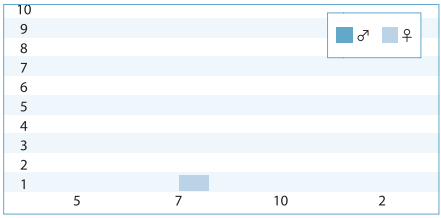


♀　　Photo：池田

背甲は黒色
腹背はまだら



卵嚢　　Photo：池田



ムラクモヒシガタグモ

叢雲菱形蛛　*Episinus nubilus* Yaginuma 1960

ヒメグモ科

80 %

X 字状網

成熟：春 **夏** 秋 冬

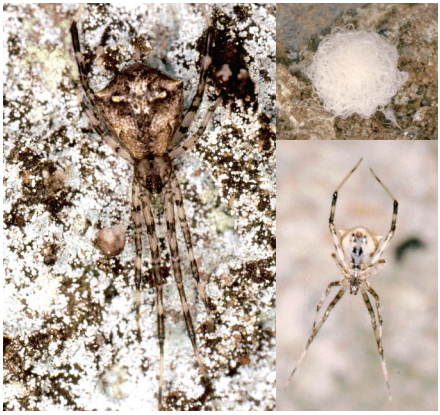
♀ 約　4 ～ 5 mm

♂ 約　3 ～ 4 mm

【観察ポイント】背甲・腹背は黒く，腹部腹面の両側面も黒い。背甲は黒色である。

【習性】菱形の腹部で，腹背にはムラ雲模様のある小さなクモ。【網性】夜間 X 字状の網を張る。地表に伸びたトラップ・スレッドの端はガム・フットで地表を徘徊する虫がこれに触れると釣り上げられる。オオヒメグモと同じ仕組みである。造網は 1 本の上糸から 2 本のトラップ・スレッドを下す。支持糸とトラップ・スレッドは大瓶状腺の糸であり，ガム・フットの粘球は集合腺である。投げつけ粘球は鞭状腺の糸と集合腺が発達した葉状腺からの粘球で作られる。【卵嚢】石の下に球形で飾り糸を備えた卵嚢を作る。【生活】オスは糸を流してメスを探す。オスの流した糸がメスの糸にかかると交尾糸となる。オスは交尾糸をはじいてメスに求婚する。

【トピック】日本で最初にムラクモヒシガタグモの X 字状網を確認したのは栃木県赤城山にて新海栄一である（1981 年）。本種は基本的に夜行性だが，暗所で造網することもある。そのときはたまたま寺の回廊の下の暗所で網上にいた。



ヒシガタグモ（成熟：春、夏）
Episinus affinis Bös&Str. 1906　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　3 ～　4 mm

ムラクモヒシガタグモよりやや大きい。背甲は黒色ではなく淡色，腹側面は白いことがムラクモと異なる。この特徴は幼体にも共通である。【網性】夜間に逆Ｙ字状の網を張る。造網法は未確認である。ヒシガタグモ類の網形はＸ字形・Ｈ字形・逆Ｙ字形と呼ばれるがまとめてＸ字状と称する。【卵嚢】飾り糸のある白色球形。
＜♀と卵嚢 Photo：池田＞

ハラナガヒシガタグモ（成熟：春）
Moneta caudifer (Dön.&Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 mm　♂ 約　3 mm

腹部の形態に特徴のあるヒシガタグモ類である。里山から山地に生息する。【網性】樹林地の中や周辺，林道の樹木の枝葉間，草間にＸ字状の網を張る。他のヒシガタグモが樹間の 1.5m から地表近くまで生息しているのに比べて，本種は低い場所ではほとんど見られない［新海］。
＜♀ Photo：新海＞

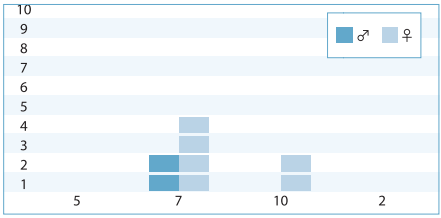
トガリクサチヒメグモ（成熟：春）
Coscinida japonica Yoshida 1994　**ヒメグモ科**

♀ 約　3 mm　♂ 約　2 mm

腹部は卵型で細長い。南西諸島から静岡県まで分布。【網性】ムラクモヒシガタグモ同様のＸ字状の網を張る。【卵嚢】飼育下で 4 月 20 日から 6 月 21 日まで 8 個を枯葉上に作った。卵嚢当り 8 ～ 12 卵，総卵数は 79 個［小笠原］。
＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：水野

幼体　　Photo：水野



クサグモ

草蛛　　*Agelena silvatica* Oliger 1983

タナグモ科　　管状住居付き棚網

100 %

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 12 ～ 18 mm

♂ 約 12 ～ 18 mm

【観察ポイント】増山雪斎（1800 年頃）の図にはクサグモの斑紋の特徴がよく描かれている。類似種のコクサグモでは黒斑がややおぼろになる。

【習性】クサグモの成熟は 7 月，コクサグモはひと月遅れる。【網性】枝間に棚網をかけ，その上に不規則に糸を引いて迷網を作る。棚網の迷網部にチリイソウロウグモが同居する例が多い。【生活】求愛オスはメス網を訪れ，シート部を触肢で叩く。交尾後にオスはメスの外雌器を分泌物でふさぐ交尾栓を作る。栓の効果は約 60 ～ 70%[桝元]。河川敷や低木には、コクサグモの類似種のヒメクサグモがいる。丹沢でクサグモの分布上限は標高 630m，コクサグモは 710m。

【トピック】出嚢時のクサグモ幼体は頭胸部赤色で腹部黒色。同時期のコクサグモ幼体は腹部も赤色。コクサグモ幼体は糸疣背面近くに赤色点が残る。

棚網

棚網はシート状の棚網部とその上に引かれた迷網部から成る。棚網にはブドウ状腺の糸を，迷網には瓶状腺の糸を使う。棚網の奥にはトンネル状の管状住居が作られる。網を張り替えずに，成長につれ次第に大きく厚くしていく。網の補修は夜間に行われる。迷網にぶつかりノックダウンされた虫の周囲をクモは旋回しながらラップする。その後，管状住居に引き込んで食べる。【卵嚢】住居奥に作られた多面体の卵嚢内で子グモは越冬し，翌年春に出嚢［新海］。冬至までは短日条件で出嚢が抑制されている［加藤輝］。2～3月に出嚢し5～6回の脱皮を経て6～7月に成体となる［宮下和］。7回脱皮の記録もある。

＜網と卵嚢 Photo：池田＞

コクサグモ（成熟：夏、秋）
Allagelena opulenta (L.Koch 1878)　**タナグモ科**

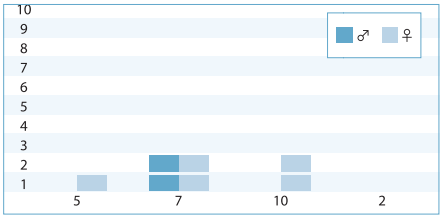
♀ 約　5 ～ 12 mm　♂ 約　5 ～ 12 mm

形態・網型・生態はクサグモに似るが，都市部にもふつうに生息している。河川敷や低い草むらには類似種ヒメクサグモが生息する。また，山地帯や東北地方にはイナズマクサグモが分布する。イナズマクサグモは地面付近に住居を持つことがある。成熟時期は挽夏（8月～9月）で，クサグモと約1ケ月異なる。【卵嚢】木の葉・樹皮・石垣などの表面に薄い円盤状の白色卵嚢を作り，親はその上にのって保護する。産卵は9～11月，90～130卵。卵はそのまま越冬して翌年4月に孵化する。

＜♀ Photo：腰高，幼体 Photo：池田＞

♀　　Photo：石田

幼体　　Photo：石田



イオウイロハシリグモ

硫黄色走蛛　*Dolomedes sulfureus* L.Koch 1878

キシダグモ科

100 %

草間徘徊性

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 12 ～ 26 mm

♂ 約 12 ～ 18 mm

【観察ポイント】脚が長い。Photo は無斑型。無斑型は全体に淡い茶色で幼体の斑紋に似ている。

【習性】草間徘徊性で，ほとんどどこにでも見られるハシリグモ。特に幼体は下草のある場所には必ず生息する。色彩や斑紋には変化が多い。成熟は 6 月下旬だが，越年する成体もいる。【卵嚢】灰色球形の卵嚢を上顎でくわえて保護する。産卵は 7 月から。出嚢が近付くと草間に不規則に糸を張った保育網を作り卵嚢を置き，幼体が分散するまで保護する。

【トピック】かつては別種として記載されていたイオウイロハシリグモの多型を同一卵嚢の幼体の飼育により同種と証明したのは中平清である。中平の交配結果（1978）では，スジブト型×イオウイロ型やスジボケ型×イオウイロ型の親からは親と同じ二型の子が得られた。この型の交配では親の雌雄を換えても結果は等しい。また，スジブト型♂×スジボケ型♀の親から生まれた子はスジブト型とイオウイロ型でスジボケ型の子は得られなかった。

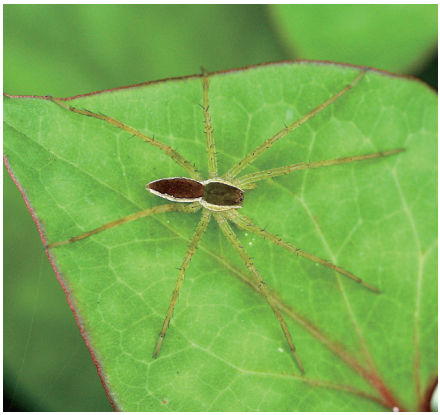
コハシリ型

スジブト型

イオウイロハシリグモの変異型

左は黒い斑紋が目立つコハシリ型，右は白い縦条と黒い縦条を持つスジブト型のイオウイロハシリグモ。体長の違いも大きく，南にいくにつれて大型になる傾向があり，東京周辺では雌成体で 12 ～ 15mm に対して，四国では 20 ～ 25mm に達する。

＜コハシリ型♀：新井；スジブト型♀：石田＞



スジアカハシリグモ（成熟：夏）

Dolomedes silvicola Tanikawa& Miyashita 2008　**キシダグモ科**

♀ 約　11 ～　18 mm　♂ 約　9 ～　5 mm

森林内で見られる。腹背の縦条の後方 4 分の 1 のところに一か所だけくびれが見られるが、類似種スジブトハシリグモでは後方のふちが波うつ。スジアカハシリグモの背甲には色彩変異があるが，スジブトハシリグモにはない。外雌器の赤い部分の有無（スジアカハシリグモにはある）でも区別できる。

＜♀ Photo：森田＞

スジブトハシリグモ（成熟：夏）

Dolomedes saganus Bös. & Str. 1906　**キシダグモ科**

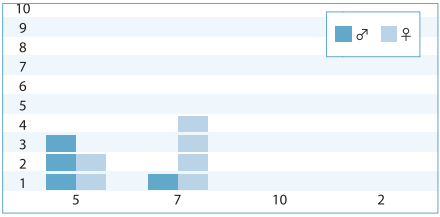
♀ 約　14 ～　19 mm　♂ 約　10 ～　14 mm

水田や池の周囲に見られる。森林内で見られるのは主にスジアカハシリグモや他のハシリグモである。昆虫以外に，オタマジャクシや小さな魚を捕えることがある［仲條，赤羽］。危険を感じると水面を走って逃げたり，水中にもぐって敵から逃れる。水中にもぐると半日は水面に出てこないこともある。

＜♀ Photo：谷川＞

♀ Photo：腰高

♂ Photo：谷川



シボグモ

絞蛛　*Anahita fauna* Karsch 1879

シボグモ科

100 %

地表徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 9 ～ 10 mm

♂ 約 7 ～ 8 mm

【観察ポイント】背甲中央に太い一文字線がある。この線は両側も太く黒い。その外側にもギザギザの縦線、腹背には絞り紋様がある。眼の配列は前から 2・4・2 と並ぶように見える。コモリグモの後中眼をやや小さくしたように見えるため，眼の配列からコモリグモと間違えられることがある。コモリグモの眼は 4・2・2 と並び，後中眼が大きい。シボグモモドキの眼はシボグモよりコモリグモに近い。

【習性】落葉層表面を徘徊する代表的な種。背甲の太い縦線は幼体でも明確。【卵嚢】直径約 10mm，内嚢と外嚢の二重構造で，外嚢下面の円形の幕（直径約 20mm）上に壺を作る。この壺に卵を 200 個ほど産みこむ。壺の口を閉じ，外嚢の上幕を作り，母グモは卵嚢を守る［中平］。産卵は 6 月中旬，7 月中旬に出嚢。

【トピック】*Anahita* はペルシャの水の女神，*fauna* も予言の女神名に由来する。日本では本州にシボグモ科のクモはシボグモしか生息していないが、熱帯にはシボグモ類は日本のハシリグモ類やアシダカグモ類のような生息をしており、大型種も多い。

ハラクロコモリグモ（成熟：春）
Lycosa coelestis L.Koch 1878　**コモリグモ科**

♀ 約　12 ～ 16 mm　♂ 約　10 ～ 12 mm

シボグモより一回り大形の種。コモリグモ科の前眼はほぼ一列に並び，後眼が大きい。コモリグモは視覚に優れているし，色覚もある。ハラクロコモリは腹面が黒色（Photo 参照）。【生活】室内飼育で 5 ～ 6 月と 7 ～ 8 月に産卵，8 ～ 9 月に 3 度目の産卵メスもあり。平均 202 卵（1 度目）と 77 卵（2 度目）。7 月 19 日の出嚢幼体は雄 6 ～ 8 回，雌 7 ～ 9 回の脱皮で成熟［宮下和］。
＜♀ Photo：池田＞

キバラコモリグモ（成熟：春、夏）
Piratula subpiraticus (Bös. & Str. 1906)　**コモリグモ科**

♀ 約　5 ～ 8 mm　♂ 約　5 ～ 6 mm

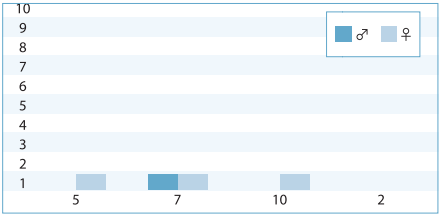
キバラコモリグモ（*Piratula*）属のクモは背甲の Y 字紋が特徴である。中形から小形の類似種が多く，識別は難しい。水田害虫の重要天敵である。稲株のすきまに管状住居を作る。【生活】越冬世代は大きく，夏世代は小さい。12 ～ 105 卵（平均 53.5），7 月以前に卵が多く，8 月以後は少ない。越冬世代の卵数は多い。夏世代は出嚢後 5 ～ 6 回の脱皮で成熟，越冬世代は 7 回脱皮で成熟（成体は 10 令）［浜村］。＜♀ Photo：新井＞

シッチコモリグモ（成熟：夏）
Hygrolycosa umidicola TANAKA, 1978　**コモリグモ科**

♀ 約　6 ～ 8 mm　♂ 約　6 ～ 7 mm

成体出現期 6 ～ 11 月．主に湿原，池や河川周辺の湿度の高い草原に生息。産卵期は 6 月と 9 月の年 2 回報告されている［新海］。飼育下で出嚢した子グモが親の腹部に乗ることなく分散する［小野］。母親の腹部の毛は先球を持たない。先球が無いのに子グモが母親の腹部に乗る種（カワベ，モリ）もいる［奥石］。カガリビ，クロコも先球はないが子グモが腹部に乗る［藤井］。
＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：安藤



カバキコマチグモ

樺黄小町蛛　*Chiracanthium japonicum* Bös. & Str. 1906

コマチグモ科

80 %

葉巻住居徘徊性

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 10 ～ 15 mm

♂ 約 10 ～ 15 mm

【観察ポイント】顎の黒や脚先の黒が目立つ。腹部の淡緑色が美しい。

【習性】イネ科やススキの葉をちまき状に巻いて住居巣とする。河川敷の草原などに生息する。オスの成熟は 6 月でメスを探索して徘徊する。オスは室内に入りヒトを咬むことがあり，咬まれた箇所は激痛を生じる。【生活】メスは発育とともに硬い葉を利用するようになる［弘中］。亜成体メスは糸でしきりを作る。オスより半月遅れて最終脱皮後，メスは仕切りを咬み破り，交尾する［新海明ら］。【卵嚢】産卵は 7 ～ 9 月，80 ～ 220 卵，最少で 48 卵。卵は約 10 日でふ化し，子グモは数日間，親グモの周りに集まっている。第 1 回目の脱皮後子グモは一斉に母親の体に食いつき，3 ～ 4 時間から半日で親を食べてしまう。

【トピック】有毒種として知られる。産卵前のメスは腹部が大きく攻撃的で，咬まれると神経毒による麻痺［大利］や，アミン系の発痛成分のため激痛を生じる［鴇田ら］。平塚市では「化け物」と呼ばれていた［大野］。

ちまき状の住居

葉をまげて作る住居は時期により構造に違いがある。高知で 6 月中旬の「大きく口の開いた空室」は多くはオスの「脱皮室」である。6 月中下旬の「密室」(産室より小型) は①若い雌雄の「脱皮室」, ②若メスと成オスの同居 (仕切はメス), ③成体雌雄の同居 (交合室). 同時期の「交合控室」は成体オスの住居で口をおおう糸幕は薄い。6 月下旬～7 月上旬の「成体メス住居」ではメスがオスを待つ (オス控室より幕が厚い). 同時期の「産室」には外壁に糸かがりのしてあるもの, 脱皮室を利用したものがある [中平]。

<住居 Photo：谷川>

ヤマトコマチグモ (成熟：春、夏)
Chiracanthium lascivum Karsch 1879　**コマチグモ科**

♀ 約　10 mm　　♂ 約　10 mm

形態・生態はカバキコマチグモに似るが, 母親食いは無い。カバキコマチグモよりやや小形。成体は 5～9 月。晩春から初夏に成体がいたらカバキコマチではなくヤマトコマチである。平地に多く生息。水田, 河原など水辺に多い。カバキコマチグモ同様, 夜間に住居より出て, 葉上を歩きながら接近してくる小昆虫を捕える。母親は子グモが巣立つまで住居の中で保護する。

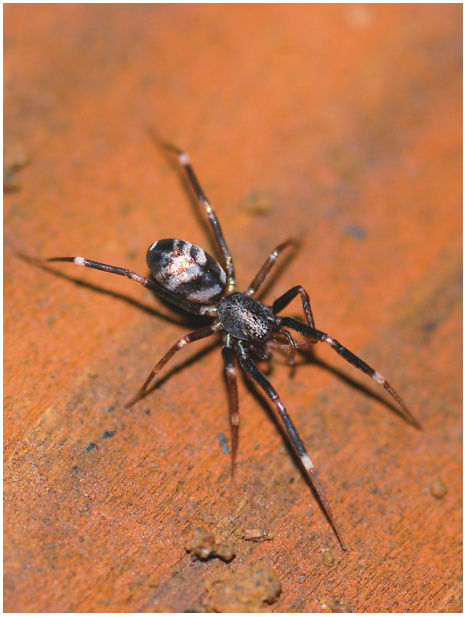
<♀ Photo：森田>

ヤサコマチグモ (成熟：夏)
Chiracanthium unicum Bös & Str. 1906　**コマチグモ科**

♀ 約　5 ～　8 mm　　♂ 約　5 ～　8 mm

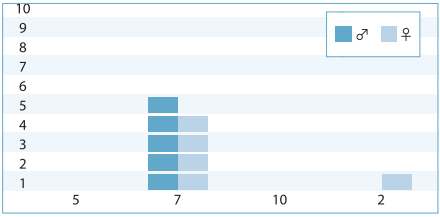
カバキコマチグモの半分のサイズしかない。池や沼の周辺, 樹林地の周辺, 林道などの草間, 樹木の枝葉間に草の葉を巻いた住居の中に潜む。【卵嚢】成熟は 5 月と 9 月, 産卵期には丁寧な住居を作り, 中で産卵し, 子グモが孵化するまで保護している。【生活】大磯町でハコネウツギの葉の筒状住居にオス, 隣の葉の筒状住居にメス亜成体 [池田]。10 月末に出嚢した幼体は飽食飼育下で 1 月 14 日に 7 令でオスは成熟 [稲葉]。

<♀と産室内幼体 Photo：水野>



♀　　Photo：腰高

ヒゲナガツヤグモ♂　　Photo：初芝



ヤバネウラシマグモ

矢羽浦島蛛　*Phrulolithus pennatus* Yaginuma 1967

ネコグモ科

60 %

落葉徘徊性

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 3 ～ 5 mm

♂ 約 2.5 ～ 4 mm

【観察ポイント】黒色の地色に金色の毛をもつ。腹背の矢羽根紋が目立つ。

【習性】落葉層の表面を徘徊する。背面に金色の毛が輝く小形種。成体は 6 ～ 8 月に見られる。トビムシなどをよく捕食する。虫の方向に向き直りとびかかるが，取り逃がすことも多い。キイロショウジョウバエ 1 頭を 40 ～ 60 分で食べる。食欲がない時はハエが脚の上を通っても取らない。脱皮の際にはドーム型の脱皮室を作る。脱皮には 37 ～ 51 分かかる。メスを探すオスは触肢を地面にたたくように震わせている。オスはメスの後方から体によじ登る。交尾時間は左右合わせて 2 時間程。交尾済みのメスはオスから逃げた［稲葉］。産卵期は 7 月中旬～ 8 月中旬。【卵嚢】2 個以上，卵嚢長径は 7 ～ 8mm，出嚢幼体数は 5 ～ 8 頭。越冬態は幼体。

【トピック】落葉徘徊性の種類でヤバネウラシマグモとヒゲナガツヤグモ *Micaria dives* (Lucas 1846) ♀♂ 2 ～ 4mm は金色に輝く毛を持つ。ワシグモのなかにもフタホシテオノグモ（39 頁）など金色の毛を持つ種類がある。

ウラシマグモ　（成熟：春、夏）
Phrulolithus nipponicus Kishida 1914　**ネコグモ科**

♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

乾燥に弱い。ヤバネウラシマグモより少し小さい。【卵嚢】長径 6.5 ～ 7.5mm を 3 ～ 5 個産卵，神奈川県平塚市で 6 月 24 日交尾，6 月 28 日卵嚢作成，7 月 2 日二つ目の卵嚢を作る。7 月 19 日に最初の卵嚢から 1 頭出嚢し，7 月 21 日 3 頭出嚢した［杉崎］。出嚢数は 4 ～ 6 頭［稲葉］。産卵期は 6 ～ 7 月。越冬態は亜成体。
＜♀ Photo：谷川＞

キレオビウラシマグモ（成熟：春、夏）
Phrulolithus coreanus Paik 1991　**ネコグモ科**

♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

ウラシマグモよりやや小さい。平地から山地にかけて広く生息。樹林地，林道などの落葉の中，草間の地表，土壌のすき間，下草の葉上など，ウラシマグモと同所的に生息するが，成熟や産卵はウラシマグモより一週間早い。【卵嚢】飼育下で卵嚢長径 6 ～ 7.5mm を 3 ～ 5 個産卵，出嚢数 3 ～ 4 頭［稲葉］。【生活】越冬態は亜成体。丹沢での上限は 460 m。
＜♀ Photo：谷川＞

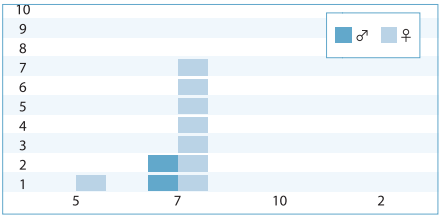
イナズマウラシマグモ（成熟：春、夏）
Phrulolithus claripes (Dön.& Str.1906)　**ネコグモ科**

♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

ウラシマグモとほぼ同じ体長と斑紋（図参照）だが，神奈川県箱根の大涌谷の個体群ではウラシマグモとは同所的に生息しない。関東では山地によく見られる［池田］。【生活】トビイロケアリの生活する地区に生活する。第 1 脚を振って歩く。夜間，アリを攻撃するようだ［小松］。本種とウラシマグモ，キレオビウラシマグモはきわめてよく似ているので，腹背の斑紋を図示した。
＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：安藤

幼体　　Photo：池田



アサヒエビグモ

朝日蝦蛛　*Philodromus subaureolus* Bös. & Str. 1906

エビグモ科

90 %

草間徘徊性

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 6 ～ 7 mm

♂ 約 4 ～ 5 mm

【観察ポイント】斑紋は淡い。背甲両側だけが茶褐色。腹部は淡い

【習性】一見クモがいないような生け垣でも葉をたたくと幼体がバラバラ落ちてくる最も普通のクモ。葉間を徘徊し，小さな虫を捕獲している。【卵嚢】産卵期は 7 ～ 8 月で，葉の上に白色の円盤状の卵嚢を作り．親はその上にかぶさるようにして保護し，指でつついても逃げない．1 卵嚢中の卵数は 20 ～ 35 個。糸を流してよく移動する。【生活】7 月に出嚢した幼体を室内飼育すると，越冬までに 6 ～ 7 回脱皮し，翌春 4 月から 3 回脱皮して 6 月に雄になった［宮下和］。

【トピック】日本のクモで日長条件と生活史関係が解明された最初の例である。若令幼体期には短日（11L）で発育が促進され，中令以後になると逆に長日（16L）で促進される。夏季は長日によって発育が遅れ，秋季の短日によって長日型の反応に変化するが，冬季は短日と低温によって発育は停止し，春季の長日と気温上昇で発育が促進される。年 1 化性で，成体が一斉に出現するわけである［浜村徹三］。千葉県内のワラ巻き調査では樹種によらず優占種だった［浅間］。

キンイロエビグモ（成熟：春）
Philodromus auricomus L.Koch 1878　**エビグモ科**

♀ 約　7 ～　9 mm　♂ 約　7 ～　8 mm

アサヒエビグモによく似ているが，腹部側面が茶褐色の斑紋がはっきりしている点で異なる。全体に暗色の個体もある。冬のワラ巻きの中などには 50%以上も見つかる。自然条件下では冬季はスギ，マツなどの太い樹木の樹皮下に袋状住居を作って越冬する。

＜♂ Photo：谷川＞

キハダエビグモ（成熟：春、夏）
Philodromus spinitarsis Simon 1895　**エビグモ科**

♀ 約　4 ～　6 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

樹肌に擬態する。樹幹に静止して動かないため見つけにくい。平地から低山帯にかけて見られ，都市公園などにも生息する。【卵嚢】5 ～ 7 月に成熟し，メスは樹幹に産卵し，卵嚢を保護する。【瞬間的体色変化】刺激すると樹から落下し，腹部後半が瞬間に黒色となる。刺激に慣れると体色変化しなくなる［池田］。

＜♀と卵嚢 Photo：池田＞

キエビグモ（成熟：夏）
Philodromus emarginatus (Schrank 1803)　**エビグモ科**

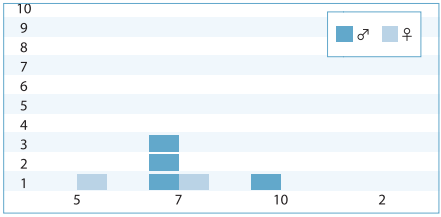
♀ 約　7 ～　8 mm　♂ 約　5 ～　6 mm

体色は紫褐色ないし灰褐色で白斑および暗色斑が多くある。背甲には灰色の U 字斑があり，腹部には灰色の丸い小斑点が多数散在している。山地の樹上や草間に生息する。【卵嚢】6 ～ 7 月に成熟し，メスは葉上に産卵し，卵嚢を保護する。

＜♀と卵嚢 Photo：千国＞

♀　Photo：石田

♂　Photo：石田



アズチグモ

揉蛛　*Thomisus labefactus* Karsch 1881

カニグモ科

80 %

葉上徘徊性

成熟：春 **夏** 秋 冬

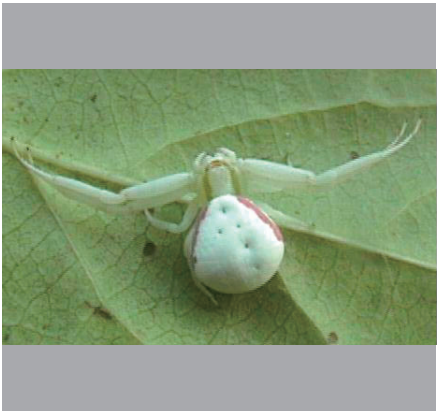
♀ 約 6 ～ 9 mm

♂ 約 2 ～ 4 mm

【観察ポイント】眼列に三角形の暗色紋があることで識別しやすい。

【習性】花の中や葉裏に潜み，シジミチョウや小型の飛翔性昆虫を捕獲。オスは非常に小型で，成体になるとメスの腹部に乗っていることが多い[新海]。【生活】産卵は7～8月，チガヤやヨシなどの葉をまげて産室を作る。第一卵嚢の出嚢数は平均 171 個，第 2 卵嚢の出嚢数は平均 16.5 個だった。9 月中旬の出嚢幼体は越冬前に 1 回脱皮，越年して 4 月から 3 回の脱皮でオスが 5 月に成熟，メスは 5 回の脱皮で 6 月に成熟。飼育下で成体の平均寿命はメスが 151 日，オスが 160 日[宮下和]。

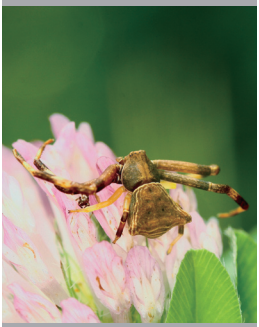
和名のアズチは腹部形が弓の的場の的山（アズチ）に似ていることに由来する。昆虫写真家の佐藤有恒氏が体色変化は UV 反射率の変化であることを初めて発見した（1987 年）。その後，ヨーロッパ産のアズチグモや近縁種は UV 反射を欠き，オーストラリア産・マレーシア産・インド産の種は UV 反射特性を持つことが分かった。オーストラリアのハチは花だけでなく、花の上の UV 反射のクモに接近していく。



ヒメハナグモ（成熟：夏、秋）
Misumena vatia (Clerck 1757)　**カニグモ科**

♀ 約　5 ～ 11 mm　♂ 約　3 ～ 4 mm

成体は 5 ～ 10 月 [新海]。箱根町では仙石原で記録がある [谷川，赤羽]。【生活】オスはメスの背にのり，脚で触れながら素早く全身をめぐり，触肢で外雌器付近をさするとメスは静止。オスはメスの腹部に回りこみ触肢を挿入。1 分間で 28 ～ 40 回を 5 分かかって注入。【卵嚢】8 月 24 日産卵，9 月 1 日孵化，11 日出嚢，14 日団居終了。子は 139 頭。他の 1 例では産卵から 8 日目に孵化，子は 48 頭 [福島]。　＜♀ Photo：池田＞



♀

♂

ガザミグモ（成熟：春、夏）
Pistius undulates Karsch 1879　**カニグモ科**

♀ 約　9 mm ～ 12 mm
♂ 約　4 mm ～ 5 mm

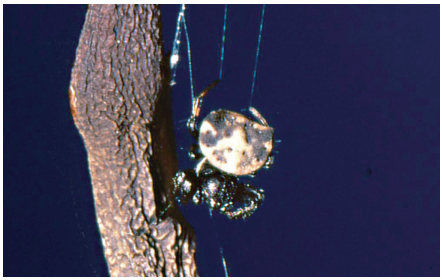
山地に多く生息。花の中や上で長い前脚を広げて獲物を待つ伏兵型徘徊性。【卵嚢】春に 30 ～ 40 卵 [植村，山川・熊田]。【生活】越冬態は樹皮下で亜成体または成体。求愛オスが亜成体メスの腹背につかまっている。ほぼ 1 日半後に脱皮したメスの腹下に回り交尾 [小松]。
＜♀♂ Photo：森田＞

アシナガカニグモ（成熟：夏）
Heriaeus melloteei Simon 1886　**カニグモ科**

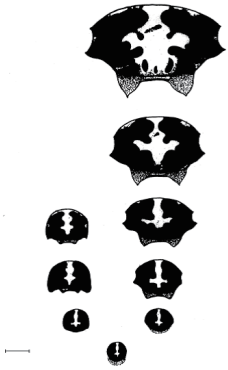
♀ 約　6 ～ 8 mm　♂ 約　5 mm

オス亜成体はメスそっくりで，最終脱皮でオス型に変化する [泉]。成体は 6 ～ 9 月に出現。全体が白色の毛におおわれている。里山から山地に生息。草原や山道の草の葉や花の上にいて待ち伏せ捕食をする。【分布】局所分布をする。埼玉県・東京都・愛知県・三重県でレッドデータブックに載っている。
＜♀ Photo：谷川＞

♀ Photo：新海



♂ Photo：新海



腹背図：加藤む

トゲグモ

棘蛛 *Gasteracantha kuhlii* C.L.Koch 1837

コガネグモ科

局地的

垂直円網

成熟：春 **夏** **秋** 冬

♀ 約 6 ～ 8 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】腹部が箱型で突起をもつ特異な形態のクモである。腹部は箱形で黒色の点斑が全身にある。

【習性】局所分布する。【網性】比較的高いところに垂直円網を張る。網の枠糸には数 cm おきに微小な白色の球（糸をたぐって集めたもの）をつけている［新海］。沢沿いや道路沿いに多い。【卵嚢】夏に樹皮上に産卵され，地衣類に似た白色である。9 月 5 日と 10 月 5 日の産卵例もあった。秦野市では出嚢日は翌年の 4 月 19 日，5 月上旬が多い［加藤む］。【生活】神奈川県松田町で，7 月 23 日にメス網へのオスの同居が観察された［池田］。飼育下でオスは 5 齢で成熟（出嚢時 2 齢），雌は主に 7 齢で成熟，8 齢もあった。未交尾メスは寿命が長かった［加藤む］。

【トピック】トゲグモのメス幼体は腹背に白い十字架紋様を背負っている。オス 5 齢，メス 7 齢で成熟する場合の図を示した。7 齢では十字架紋様が消えて後端に髑髏模様が浮き出ている［加藤む］。

♀

卵嚢

ムツトゲイセキグモ（成熟：夏、秋）
Ordgarius sexspinosus (Thorell 1894)　**ナゲナワグモ科**

♀ 約　7 mm　～　11 mm
♂ 約　2 mm

雌雄とも背甲前部に 2 本，後部に 4 本の 6 突起。公園から山地まで生息。かんきつ類・ツバキ・クリ・クワの樹に発見例。【網性】昼間は樹木や草の葉裏に静止し，夕方から第 2 脚先端より粘球を吊るし，接近する蛾に粘球をぶつけて捕獲。【生活】年 1 世代，3 ～ 6 回産卵。＜ Photo：新海＞

マメイタイセキグモ（成熟：夏、秋）
Ordgarius hobsoni (O.P.-Cambridge 1877)　**ナゲナワグモ科**

♀ 約　6 ～　7 mm　♂ 約　2 mm

形態は腹部に多くのコブをもつ点で他種から容易に見分けられる。オスの背甲の突起は後方に 4 本だけである。【網性】生態・網型はムツトゲイセキグモに似る。投げ縄作成行動はトリノフンダマシの横糸作成行動と共通［新海明］。【卵嚢】突起のついた暗褐色の卵嚢を作成，56 ～ 72 卵［鈴木勝］。【生活】8 ～ 9 月上旬にかけて成熟。
＜♀ Photo：高橋＞

腹背

側面

ゲホウグモ（成熟：夏）
Poltys illepidus C.L.Koch 1843　**コガネグモ科**

♀ 約　12 mm　～　18 mm
♂ 約　4 mm　～　6 mm

同じ母から生れた子でもコブには形態変異がある［石野田，小笠原］。【網性】夜間にレコード盤を連想させる目の細かい垂直円網を張る。横糸は最小 67 ～最多 132 本［船曳］。【卵嚢】530 ～ 600 卵［石井］。【生活】5 月 29 日に出嚢，出嚢から最終脱皮まで平均 105 日（オス 3 頭は 35 日）［小笠原］。＜♀ photo：梅本直美＞

コラム 3

北上により関東で発見されるクモ

日本各地の年平均気温は次第に上昇している。これは『理科年表』を見れば明らかであり，地球史からみて「地球は温暖化していない」とする見解もあるが，100 年前と比べて「地域が温暖化している」事実は曲げようがない。1990 年の東京都は（15.6℃），30 年前の 1960 年の静岡市の温かさである（1950 年の東京の年平均気温は 10.2℃だった）。そこで，1960 年には静岡までしか分布していなかったクモが 1990 年には東京に分布する可能性があり，代表的なクモがスズミグモであった［新海栄一，池田］。スズミグモは 2012 年には太平洋側は埼玉県，日本海側は石川県まで北上している。

他にもチュウガタシロカネグモやマルゴミグモといった静岡以西にしか分布していなかったクモが 1980 年以降には神奈川県や東京都内でも発見されるようになってきた。今後，北上して関東地方に分布しそうなクモに，2011 年には西日本から静岡県までしか分布していないクモがあげられる。マミクロハエトリ（83 頁），シマササグモ（73 頁），ホシスジオニグモ，ホシヒメグモモドキといった種が該当する（新海栄一『日本のクモ』参照）。

ホシスジオニグモ *Neoscona theisi* は海岸の草間・低木間に垂直円網を張る。昼間は網の一端の枝や葉裏に潜んでいる。色彩・斑紋の変異が多い［新海栄一］。ホシヒメグモモドキ *Theridula gonygaster* は林道などの草の葉裏，樹木の葉裏に不規則網を張る。東京都で発見されたことがあるが，いまは三重県が北限となっている。

マルゴミグモ♀　Photo：谷川

ホシスジオニグモ♀　Photo：谷川

ホシヒメグモモドキ幼体　Photo：谷川